つれづれ彩時記

藤原辰史

「夢の世界」どう描かれたか

「イカの踊り食い」体験

食べる行為の深遠さ　生態系に敬意

一昨年、京都の居酒屋でイカの踊り食いを初体験した。踊り食いは動物虐待だ、残酷すぎる、という非難や抗議もあるそうだが、私はほとんどそのように思わなかった。ほとんど、というのは、イカの足が醤油のなかでにゅるにゅると動いているとき、サディズムが発動する寸前に、これは食べものだろうか、もしかしてこれを噛み切る私は野蛮だろうか、という疑念が頭をかすめたからだ。だがすぐに、その疑念を払拭してあまりある歯ごたえと、吸盤が頬の裏側に吸いつく感覚の虜になった。本当に新鮮で旨い。

とはいっても、もちろん踊り食いというのは、人間の食体験のなかではかなり特殊である、ということは認めなくてはならない。人間の口に入ってくるものは、ほとんどが、生命を絶たれたあとの動物か植物の亡骸であり、それを刻んだりあぶったり、菌によって発酵してもらったりして風味を豊かにし、歯や舌の感触を複雑なものにしたからである。だから、生きたまま口のなかに入れることに抵抗がある人の気持ちも、けっして分からないではない。人間は目の前の食べものが生きていない、ということを無意識に確認して食べている。踊り食いは、食べる人間にこの事実をつきつけるのである。

水揚げされた大量のスルメイカ＝島根県海士町

そして、踊り食いは、もう一つ別の、食べる行為の深遠さを教えてくれる。

口のなかに入ったイカは、ほんの一瞬かもしれないが私の体内で生きている。しかし、口に入れるだけでは、私はまだイカを征服した気にはならなかった。のみ込まなければ、まだイカに対する人類の勝利を言祝いではいけない、嚥下することでようやくイカは私のものになるのだ、という、いままで思ったこともないドグマ（教条）がいまにも頭を支配しようとしていた。

ところが、踊り食いという経験は、そんな傲慢な私の鼻っ柱を簡単にへし折ってしまう。のみ込んだとしても、食道、胃、小腸、そして大腸は、本当に人間の内に位置するのだろうか、という根源的な疑問にぶつかったからだ。胃酸の雨を浴びせかけ、腸の蠕動運動に揉んでやるだけでは、まだ自分のものにはならないのではないか。いや、食べものは、口から入って尻から出るまで、ずっと外にあるのではないか。

消化器官の外部性は、実は、私の実感でもある。カレーライスを食べたあと水を飲むと必ず腹を下すというような貧弱な胃腸の持ち主であるためか、胃腸はいつも外からの侵入者に対する最前線であった。また、高校の生物の授業で、消化器が人間の外部であることを習っていた。受精卵が細胞分裂を繰り返し、徐々に生物の形を整えていく途中、細胞分裂した球体の表面が中に潜り込んでいく現象がある。腸管は、外部の内部化によって形成されていく。内科という医学の専門分野の名前から、つい胃腸は人間の内部であると思いがちだが、実は、人間の外部なのである。

とすると、踊りながら食べられたイカにとって、人間は一つの通過点でしかない。受精卵から細胞分裂を繰り返し、卵から孵化して自由に海原を泳ぎ、プランクトンをモグモグ食べ、漁船の網にかかってから、居酒屋のテーブルに並んだあと、私という人間を通って、再び外界に死骸となって出てくる。しかも、たとえ貧弱な胃腸であっても、そこには百兆の菌が蠢いていて、豊かな環境を形成している。つまり、私たちは生態系にまとわりついてそこを通過する生きものから栄養を吸い取る一本のチューブなのだ、と言っても過言ではないだろう。

踊り食いのおかげで、私は、一本の軟弱なチューブとして、内であり外である生態系に深い尊敬の念を抱いたことを、いまは亡きイカの墓前に報告したい。

◆「つれづれ彩時記」（毎月1回）は4月から、木曜日に掲載します。

ふじはら・たつし　1976年、北海道生まれ。京大大学院人間・環境学研究科博士課程中退。2013年から人文科学研究所准教授。専門は農業史、農業思想史。著書「ナチスのキッチン」「食べること考えること」など。

の記憶を意識的に構成し直して
「アパリシオン」を作曲したので
は、という。

セ部で・
エッ教育込み
愛込み福島
た福島・28日、
ら。

な地
午後2
大末川
館大衣
河の高
活動』

からみえてきたもの」と題して話す。無料。同機構＝075・465・8236。

●みんぱくウィークエンド・サロン　22日午後2時半、大阪府吹田市千里万博公園の国立民族学博物館（06・6876・2151）。竹沢尚一郎教授の「災害の記憶とコミュニティ」。観覧料は一般420円。

●いま問う！　「イスラム国」の主張　25日午前10時半、大阪市北区中之島2、中之島フェスティバルタワー18階、朝日カルチャーセンター中之島教室（06・6222・5222）。講師は堀川徹・京都外国語大教授。一般2916円。

●放課後の文学教室　25日午後3時半、京都市下京区四条烏丸北東角、京都三井ビル4階、佛教大四条センター（075・231・8004）。荻原広・佛教大教授が「日本語教育とは何か」と題して話す。千円。